

# 人類学にとっての自然化(修正版)

—回顧と展望—

浜本 満\*

Certain Obstacles to Naturalization in Cultural Anthropology:  
Past Debates and Beyond

Mitsuru Hamamoto

本論文の目的は、人類学の自然化の可能性を、人類学の過去に遡って再考することにある。人類学には過去に二回自然化の問題に直面した歴史がある。一回目は人類学が自然科学たりうるかどうかを巡ってなされた1950年代から1960年代にかけての論争であり、二回目は1970年代から1980年代にかけての社会生物学を巡る相互の無理解に終始した論争だった。いずれにおいても文化人類学者の大多数は自然化を退ける選択をしたように見えた。一見正しいものに見えたこの選択は、大きな理論的な袋小路につながる危険が潜んでいた。本論文では、人文・社会科学全体がかかわった一回目の論争を中心に、人類学にとっての自然化の障害となりうる核心を明らかにするとともに、自然科学における経験主義的・実証主義的因果概念の限界を指摘すると同時に、生物学の領域でのダーウィニズムのロジックによって、この両者の懸隔を乗り越える可能性を示したい。

The purpose of this paper is to reconsider the possibility of naturalization in anthropology, looking back at anthropology's past theoretical disputes. Anthropology has faced the problem of naturalization twice in the past. The first was the debate in the 1950s and the 1960s, over whether anthropology (or social science in general) could be a natural science. The second was the debate over sociobiology in the 1970s and 1980s, which unfortunately ended in mutual misunderstanding. In both cases, the majority of cultural anthropologists seemed to have chosen to dismiss naturalization. This choice, seem-

---

\*一橋大学名誉教授・九州大学名誉教授

**Key Words** : naturalization, causality, P. Winch, W. Dray, eidos (causa formalis)

**キーワード** : 自然化, 因果関係, P. ウィンチ, W. ドレイ, 形相因

ingly the right one then, ran the risk of leading to a major theoretical impasse. This paper addresses the primary controversy within the humanities and social sciences to elucidate potential obstacles to the naturalization of anthropology, and highlight the limitations of empiricist and positivist causation concepts in the natural sciences. Lastly, I will explore the possibility of bridging that gap through Darwinian logic.

1 はじめに— 自然化のほうへ	2.5 問題の所在
2 自然化をはばむ議論—第一次自然化問題	3 自然化の可能性
2.1 自然科学はどのように理解されていたのか	3.1 本当の原因ではない？
2.2 論理実証主義的自然科学への異議申し立て	3.2 因果メカニズム
2.3 P.ウィンチと社会科学の理念	3.3 原因概念の拡張
2.4 実践的関心と「説明」— W.ドレイによる異論	4 形相因の復権？
	4.1 アリストテレスと4原因説
	4.2 形相的視点の不幸
	4.3 比喩の反転

## 1 はじめに— 自然化のほうへ

「自然化」で何を意味するのかは論者ごとにさまざまだが、ここでは自然科学とシームレスに接続する学問として自らを位置づけ直す試みを指す。なぜその必要があるのか。理由は多々あげることができるが、ではすぐさま接続し、思い切って人類学をたとえば進化生物学や認知科学の一部と位置づけ、基礎から再建しようということになるかという、それに抵抗する理由もある。正当な理由から、どう見ても理不尽な理由まで。

すでに立場を変更した一部の人類学者の分析や、かつて社会生物学が人間社会の研究に乗り出したさいにしばしば耳にした語り口のなかに、旧来の人類学者の多くにはちょっと受け入れがたいものがあったというのもその一つだ。穢れの禁忌が生命に危険をもたらす物質を忌避する傾向性で説明できるとされたり (Boyer 2001: 119, 133–134, 214–215)、人肉食や人身供犠はタンパク質不足の解消のためだとされたり (Harris 1979: 333–339)、インセスタブーが生物学的進化の産物であ

るインセスト回避傾向の単なる延長だとされたり (Wilson 1999: 195–196) といった具合に、これまで文化人類学が積み重ねてきた諸々の説明が廃棄処分されて、身も蓋もない因果関係による説明に置き換えられてしまうのを見るのは、愕然とするものがある。人類学の伝統に属する他の説明や語り口のほうが、はるかにましに見える。

認知科学や生物学に包摂されることが、もしこういうことならお断りだ。望ましいのは、これまでの人類学の分析方法、人間社会における諸実践や語りや制度の相互のつながりを、「意味」(象徴ロジック、記号ロジック、言語など呼び方はいろいろだが) の関係として記述・分析するやり方を、ご破産にするのではなく、生物学や認知科学における知見とシームレスに接続するような知のあり方である。ダーウィンによる進化のアルゴリズム (Dennett 1995, chap. 2)、変異を産出してはその結果を絞り込む(「自然選択」)という、ダーウィン進化論の説明ロジック(ただし DNA に実装された形に限らず、別の媒体(おそらくは言語等の表象)に実装された形で)が鍵になるという予感がある。

しかしその前に検証しておくべきことがある。人類学には過去に二回自然化の問題に直面した歴史がある。一回目は人類学が自然科学たりうるかどうかを巡ってなされた 1950 年代から 1960 年代にかけての論争であり、二回目は 1970 年代から 1980 年代にかけての社会生物学を巡る相互の無理解に終始した論争だった。どちらも人類学者の多数は自然化に背を向ける選択をとったように私には見えた。

人類学と自然科学とで対象の違いはあれ、何がそこまで違うと考えられたのだろうか。今、再び自然科学との関係のあり方が問われるべきときに、当時いかなる点で人文・社会科学に自然科学的なやり方がなじまないと考えられていたのかを、確認するのは意味のないことではない。自然化に対する乗り越え困難な障害と見られたところに、逆に自然化の推進を可能にするヒントがあるかもしれない。問題の輪郭がより明瞭に見て取れる 1950 年代から 1960 年代の議論を中心に検討してみたい。

## 2 自然化をはばむ議論——第一次自然化問題

### 2.1 自然科学はどのように理解されていたのか

1950年代から1960年代にかけての第一次自然化問題は、科学＝論理実証主義、経験主義的實在論に対峙し、それを退ける形をとった。

社会・人文科学も科学である以上、当然自然科学と同じ法則定立的な原理にしたがうべきとするのが、自然科学の側からの主張である。それによると世界は経験可能な所与の原子的事象からなりたっており、事象相互の一定不変の随伴関係、つまりそれらの生起の規則性は経験を通じて与えられる。この経験的規則性が因果法則にはかならない。法則は、具体的事例によって確証（反証）される。科学とはこんなふう因果法則を打ち立てる活動にかならない。説明されるべき事象は、先行する諸条件と因果法則とから演繹できなければならない。それができるということは、諸条件と因果法則が与えられれば、結果が予測できるということを意味する。なんて素晴らしい！社会科学であれ人文科学であれ、科学というからにはそうでなくちゃいけない？

ヘンペルとオッペンハイムによる科学的説明の被覆法則モデル（covering law model）あるいは演繹的法則的説明モデル（deductive-nomological model）は、こうした自然科学における説明のあり方を以下のように定式化している（Hempel and Oppenheim 1948）。

ある現象 E（「被説明項（explanandum）」）を、前提条件  $C_1, C_2, \dots, C_k$  および一般法則  $L_1, L_2, \dots, L_r$ （合わせて「説明項（explanans）」）が説明するのは、以下の 4 条件が満たされる時およびその時に限る。

1.  $C_1, C_2, \dots, C_k$  と  $L_1, L_2, \dots, L_r$  の連言から E が論理的に導出できる。
2.  $C_1, C_2, \dots, C_k$  のみからは E を導出できず、少なくとも一つ的一般法則が必要である。
3. 説明項は経験的内容をもっている。
4. 説明項は真である。

さて、人類学を含む人文・社会科学で、議論をこのような形の説明に置き換えることができそうな分野がどれくらいあるだろうか。19世紀なかばのJ. S. ミルの「道徳科学 (Moral Sciences)」の構想のように、人間の行動も「他のすべての自然事象と同様に、普遍の法則に従う」(Mill 2011: 80) つまり「継起する現象についてのあらゆる科学的理論の基礎となる因果関係の斉一性は人間の行為にも当てはまる」(Mill 2011: 582) とすれば、こうした説明の可能性を思い描くことは可能であった。多くの賛同者がいたとしても不思議ではない。

## 2.2 論理実証主義的自然科学への異議申し立て

一方、経験論的な実証主義のこうした目標に対する異論も早くからあった。ウリクトはデュルタイ、ジンメル、マックス・ウェーバーらの名をあげている。「これらの思想家はすべて、実証主義の方法論的一元論を拒否し、また厳密な自然科学こそ、現実を合理的に理解するさいの唯一最高の理想であるという見解を、拒絶する。彼らの多くは、物理学や化学や生理学のような、再現可能で予測可能な事象の一般化を目指す科学と、歴史学のような、対象の個性的で一時的な特質をとらえようとする科学との相違を、強調する」(Wright 1971: 5)。

イギリス人類学の内部でも1950年代にはエヴァンズ＝プリチャードは自分たちが、人類学を自然科学の一種であるとみなす「この国の大部分の同僚たち」とは、異なる立場にたつことを早くから宣言していた。彼によると人類学は「自然科学によりは、歴史学のある分野——社会史や制度史、観念の歴史……——にはるかに似て」いるのであり、「より高い抽象化のレベルで総合し、また比較と一般化をよりあからさまに目指しているという違いはあるものの、人類学は歴史学と同じ記述的統合をその方法としている」(Evans-Pritchard 1951: 60–61)。

以下では1950年代以降に、実証主義的な方法論的一元論に対抗する理論的根拠を提出し、人類学にも大きなインパクトを与えたふたりの議論をとりあげよう。人類学内部の相対主義と解釈学的傾向を加速させ、多大な影響を与えた分析哲学者ピーター・ウィンチ、もうひとりと同じく1950年代に歴史学の分野で、反自然主義の立場をクリアカットに表明したウィリアム・ドレイである。

### 2.3 P.ウィンチと社会科学の理念

『社会科学の理念とその哲学との関係 (*The Idea of a Social Science and Its Relation to Philosophy*)』(Winch 1958)において、社会科学における説明は「自然科学において提供されている種類の説明とは論理的に両立不可能」(Winch 1958: 72)だとウィンチは言い切る。この大胆な主張の根幹には、人間は言葉=概念を通じて世界を経験しているという認識がある。自然科学においては、研究対象である「世界」とそれを記述する「言語」とは、独立したものとして切り離されている。「世界」のほうは経験的に、つまり実験や観察を通じて直接にアクセスすることができる。それに対しウィンチは、人間にとっての世界—社会関係や社会的出来事—は、それを記述する言語から独立してはおらず、その概念=「意味」と不可分であると主張する (Winch 1958: 15)。

ここでの「意味」はけっして意識された主観的な意味ではない。ウィンチは投票を例にとって言う。投票する人は、明確な動機や理由なしに単に惰性で「投票」しているだけかもしれない。それでも彼の行為には「投票する」という明確な意味がある。彼は「単に紙切れに印をつけ」ているだけではない。さらに、「それはゲームでの一手を指しているのでも、宗教的な儀礼の一部での所作でもない」(Winch 1958: 49)。何がある特定の行為を「投票」という行為にするのかは、投票とはみなしえない行為とそれとを区別する暗黙の基準によっており、それゆえその行為はウィトゲンシュタイン的な意味での「規則にしたがう」行為である。彼の行為が「投票」という意味を獲得するのは、彼の所属する共同性の内部でそうした基準にのっとって、それが「投票」として通るからである。こうした暗黙の基準は必ずしも明示的ではなく、「生の形式 (form of life)」のなかに非反省的に所与として受け入れられている。

それゆえ社会関係や社会的出来事についての諸概念は、それらの関係や出来事に対して「内的」な関係にある、つまり「内在的」であると彼は指摘する。たとえば雷鳴の轟という出来事は、「雷鳴の轟」という概念とは独立に存在する。電気の嵐と雷は、人間がそれらについての概念を形成し、それらと結びつけるはるか以前から存在していた。両者の結びつきは互いに独立したものどうしの「外的」結びつきである (Winch 1958: 125)。それに対して、人が「投票」という概念をも

つ以前から、のちに投票と呼ばれることになる、紙切れに印をつけて箱の中に入れていくような行為をずっとおこなっていたとは、とても考えられない。

社会的行為の相互関係も内的である。たとえば、上官の「かしら右！」の号令で、兵士たちが一斉に右を向く。この出来事を指す概念「命令と服従」は、この出来事にとって内在的である。電気嵐と「雷鳴の轟」との関係とは対照的に、人が命令と服従という観念を形作るようになる以前に、命令を出したりそれらにしたがったりする行為をずっとおこなっており、のちにそれが「命令」、「服従」という言葉で呼ばれるようになったのだなどと想定するのはナンセンスである。そういった振る舞い自体が、そうした観念を彼らがもっているという事実のあらわれ以外の何ものでもないからである (Winch 1958: 125)。

上官の「かしら右！」という発声と、兵士たちの頭が一斉に右を向くこととの関係も、もちろん概念的関係、すなわち内的関係である。上官の号令の音量の凄まじさが、兵士たちの頭を回転させたといった、外的な因果関係ではない。兵士たちは、上官の叫びの音圧、その他に反応しているのではなく、その意味に応じた行動をしている。それは「命令」に呼応する「服従」であり、何が命令として通り何をもって服従となるかは、彼らが属する「生の形式」のなかで非反省的に参照されている基準による。兵士たちの行為が服従という意味をもつためには、彼らが主観的に自分たちは命令に対して服従しているのだとか、「かしら右」と言われるとしかじかの仕方では振る舞うことにしているのだとか意識している必要はない。ちょうど会話において、やりとりする言葉の規則がつねに意識されていないように。「社会的相互行為は物理的システムにおける力どうしの相互作用によりは、会話における概念の交換になぞらえたほうが、より実り多い」のである (Winch 1958: 128)。

さらにウィンチによると、人間についての経験主義的な説明においては、理由や動機や意図はしばしば行為の「原因」であるかのように（つまり、あたかも行為に対して「外的関係」であるかのように）語られるが、これも誤りである。理由や動機も行為と内的な関係にたつ。図書館で調べ物をしたいという「理由」で講義を休講にしようといった場合、私は図書館で調べ物をしたいという私の欲望から、自分が休講するだろうと推測する必要はない。誰かが石を投げたという事実とガラスが脆いという事実から、ガラスが今にも割れるだろうと推測するのと

はわけが違う。また私は休講という自分の未来の行動についての自分の予測の正しさの証拠として、図書館で調べ物をするという理由を提出しているわけでもない。それは単に私の行為を正当化するものなのである (Winch 1958: 81) (事例は日本の状況に即して変更してある)。理由や動機に言及することは、「行為をわれわれの社会で周知の行動モードの用語によって了解可能 (intelligible)」にし、それを「コンテキストにふさわしい配慮によってなされたもの」として示す、つまり、筋の通ったものにする事なのである。「人の行為は、これら (理由や動機等々) からまさにその意味を導出する」 (Winch 1958: 82)。

人が生きる世界のあらゆる出来事や事物は、諸々の概念を通じて経験されており、人がある概念 (言葉) を他の人々と同じ仕方を使っているかどうか (ある概念の使い方の「規則」にしたがっているかどうか) が判断される諸々の基準は、人々の生きる社会の固有の「生の形式」の内側にある。こうした基準と規則が、社会の成員のそれぞれの行為に「意味」を与え、社会関係や相互行為やそこでの諸々の出来事に内在的な意味を与える。当然そこにはある規則性が現れるかもしれないが (上官が「かしら右！」と叫ぶと、ほぼ必ず兵士たちの頭が右に回転する、等々)、その規則性は、自然科学におけるそれとも、単なる統計的な規則性とも異なる、論理的な関係 (概念的な関係) である。それは未来の出来事を「予測」するためのものではなく、出来事を了解可能なものにするつながりである。万有引力の法則 (規則) にしたがうことなどできないが、生の形式の内側に発する規則は、まさにしたがうことが前提であるような (それとの区別においてのみ規則であることが示されるような) 規則であり、必然的な未来の予測をそれらから引き出すためのものではない。ウィンチは「予測 (prediction)」は社会科学的理解にはなじまないと述べる。社会科学における理解は、自然科学における説明ではなく、「解釈」なのである (Winch 1958: 94)。

かくしてウィンチは社会科学においては、自然科学における実証主義的な方法論は不適切であると結論づける。ミル流の経験主義は通用しない。ミルによると、経験される規則性から法則定立へというやり方において、「道徳科学」における説明も、自然科学と根本的には同じ論理構造にしたがうことになる。しかし上で見てきたように「問題となるのは経験的なものではまったくない。それは概念的である。経験的な研究によって真実がどうなっているかを示せるかという問題では

なく、どう語れば筋が通るのかということについて、哲学的分析が何を明らかにできるかという問題である。…人間社会という概念は、自然科学で提供される類の説明とは論理的に両立しえない概念の図式に関係しているのである」(Winch 1958: 71-72)。

ウィンチは、その相対主義的な主張のほう（人類学的にはやや残念な論文「未開社会を理解すること」でより先鋭的に表明され、哲学者を巻き込んだ「合理性論争」に発展した）で有名かもしれない（Winch 1964; B. R. Wilson 1970; Jarvie 1972; Gellner, Jarvie, and Agassi 1973; Hollis and Lukes 1982）。私見ではこちらの論争は擬似問題を巡る不毛な論争だった（浜本 1985）。自然化に向けて対処すべきは、むしろ社会的現象どうしが、外的・経験的な関係ではなく概念を媒介とした「内的」関係でつながっているという議論のほうだ。自然科学における経験される規則性から法則定立へ、そして法則をキーにして現象を演繹するという説明方法に対するあからさまな異議申し立てになっているからだ。問題は、この彼が「内的」な繋がりとして述べるものをどう考えたら良いのか、である。自然科学の方法が、これをつかう枠組みを提供しそこねるといふのなら、ウィンチの主張にしたがって、人文・社会科学は自然科学とはあいられないとするしかないことになる。

## 2.4 実践的関心と「説明」—— W. ドレイによる異論

ダントによると、ヘンペルの被覆法則モデルに対する歴史学者たちの対応は、三つに分かれた（Danto 1958: 298）。ヘンペルのモデルを原則として受け入れた者、出来事の「説明」ではなく「理解」を目指すのだという19世紀来の解釈学的な立場に固執する者、そして「説明」には一般的法則に訴える被覆法則モデルとは別のタイプの説明があるというドレイたちの立場である。彼は「説明」行為そのものの実践的意義に立ち返り、被覆法則モデルを「歴史哲学が模範とするには危険なモデル」であるとして拒絶する。それは「歴史における説明について、根本的に間違った仕方である、あるいは重要な点で誤解につながる仕方である」と語っているからである」（Dray 1957: 1）。

実用的、実践的活動としての説明

第一にドレイは、説明は本来実践と関係した実用的な行為だと考える。多くの

人々がおこなっている通常の説明活動は、被覆法則モデルが指示しているものとは異なっており、むしろ被覆法則モデルのほうがきわめて特殊なのだ。「『説明』という言葉の論理型が問題である。実証主義者たちはこの言葉を形式論理の用語だと誤ってとらえている。実際にはそれは実践的、実用的な (pragmatic) 用語なのである」(Dray 1957: 20)。

説明は、わけのわからない現実と直面したりする都度誰もが求めおこなっている、現実的な要請や問いに対する実用的かつ実践的な活動である。説明は、それゆえ真理との抽象的な関係においてではなく、実践的な場面におけるその利得において考えるべきだ (Dray 1957: 73)。

「了解可能性 (intelligibility)」こそが説明の目指すものであり、説明されることによって、なるほどそうかと合点していくのが説明の利得である。説明を求めた人が合点がいかなければ説明とは言えない。「法則をもちだせば、それで説明になるというわけではないのだ」(Dray 1957: 73)。被覆法則モデルは「形式的に (formally)」は健全であっても、「実用的に健全 (pragmatically sound)」(Dray 1957: 74) であるとは限らない。それは真ではあるが、誰もがそれで合点していくわけではない。

#### 連続的出来事系列モデル

ドレイはこれを自動車のエンストを例にとって説明する。少し長くなるが、紹介しよう (以下, Dray 1957: 67-70)。

私の自動車のエンジンが急に動かなくなるとしよう。修理工場のメカニックは、点検したのちに私に「これはオイルタンクの漏れのせいですね」と言う。これはエンストの説明になっているだろうか。それは誰が誰に言ったかによると、私は言いたい。より正確な言い方をすれば、それは、他にどのようなことがすでにわかっているか、あるいは文脈から知ることができるかに依存している。そばに立っている、内燃機関に精通している整備助手にとっては、それは十分に説明でありうる。しかしボンネットの下で何がおこっているのかについて全く知らない私にとっては、それはまったく説明になっていない。(Dray 1957: 67)

**大畑がいみじくも指摘しているように(大畑 2019: 57)**, ここで誰かが得意げに被覆法則モデルにのっとなって,

1. この自動車のオイルタンクの底には漏れがある。(初期条件 C1)
2. オイルタンクの底に漏れがある自動車なら、すべてそのうちにエンストを起

こす。(一般法則 L1)

3. 故に、この自動車はエンストを起こした。(説明すべき出来事 E)

と私に教えてくれたとしよう。明らかに私にとって何の助けにもならない。「オイルタンクの漏れのせいですね」という説明を、単にもってまわった面倒くさい仕方で言い直ただけのことで、あいかわらず私にはわけがわからない。私には被覆法則モデルなど何の役にもたっていない。そしてそれは車に精通した整備助手にとっても同様である。大げさな法則の形で述べられなくても、彼にはすでにわかりきったことなのだから。

ではどんな説明だと良いのだろう。私は自動車エンジンの仕組みの概要と、潤滑系の重要な役割について教えて貰う必要がある。たとえば「エンジンを動かすのはシリンダーの内部のピストンの運動です。もしピストンを潤滑するオイルがシリンダーに届かなければ、乾いたピストンはシリンダーの壁との摩擦で熱くなります。熱くなった金属は膨張するので、ピストンがシリンダー内で固着してしまいます。オイルは通常オイルタンクからパイプを通してシリンダーに届きます。もしタンクの底に穴があき、オイルが流れ出してしまうと、シリンダーにオイルが届かなくなります。そうすると遅かれ早かれエンジンは固着してしまうのです。」といった説明で合点がいく (Dray 1957: 67-68)。私のエンスト理解は「今やそれが起きるにいたる出来事の経緯を自分でたどることができるという事実」に直結している。当初の「オイル漏れ→エンスト」ではわからなかったことが、両者のあいだを埋める一連の出来事の系列をとらえることによって、今や了解可能になる。

ドレイはこのタイプの説明を「連続的出来事系列モデル (model of the continuous series)」(Dray 1957: 66) と呼び、歴史における説明は主としてこのタイプであるとする。これは彼がのちに導入する説明の種類の区別では、「いかにして」の説明に当たる (Dray 1957: 161)。このモデルでは、唯一の最終的に完全な説明は求められない。「説明の必要性」次第でいくらかでも下位の出来事に細分化可能である。たとえば、「なぜ熱くなった金属は膨張するの」という困惑がさらなる説明を求めるといふふう。逆に、すべてが説明しつくされなくても、説明に対する要望が終われば、説明の役割は終わる。これに対して、エンスト車を前にしたメカニクにとって、重要なのはその原因である。何が原因で、なぜエンストが起こった

か。オイル漏れがその答えである。オイル漏れで「いかに」してエンストが起こるかは、彼にとっては既知のことで、あえて問う必要のない問いである。

### 実践的介入と因果説明

ヘンペルのモデルは、原因究明の「なぜ」の問いに対する説明ではある。しかし、ドレイの実用論的視点は、その対象が因果分析に移っても貫かれる (Dray 1957, chap. 4)。彼はコリングウッドにならって、「原因」とはそれを操作することで結果をコントロールできる一種の「ハンドル」のようなものだという (Dray 1957: 95)。「なぜ」の問いに答えようとする原因究明は、結果を制御するという実践的な関心と不可分なのだ (Dray 1957: 98–102)。

たとえば、ナイチンゲールと彼女の助手たちが「不潔さが病気を引き起こす」と述べたとき、彼女らはただ繰り返し観察することを通じて、そうした結論に達したわけではない。

ここでは追加的な事実を考慮に入れねばならない。出てきた因果連関の結論は、単にこれらの女性は何を見たかに基づいているだけではない。彼女たちが自分たちに何ができたかわかったことにも基づいている。自分たちが不潔の度合を「操作」することによって、罹患率を制御できるとわかったという事実が、彼女らにとって不潔さが病気を引き起こすと結論する適切な根拠であったのだ。(Dray 1957: 93)

「原因」究明は実用的な実践である。原因は、問う者にとって重要であると同時に、結果にとっても重要なものでなければならない。この二つの重要性のチェックを経て、「原因」は認定される。ドレイは両者を「帰納的 (inductive)」および「実践的 (pragmatic)」と呼ぶ (Dray 1957: 98)。前者は必要条件に当たるもの、そのことがなければ結果は起こらなかつたろうと考えられるものであり、後者はさまざまな範疇の事柄を含んではいるが、人がそれを操作することで、ある事態を生じさせたり、防いだりできるようなこと、そこですることができたかもしれないこと、しないでいることができたかもしれないこと、するべきだったこと、するべきではなかったこと、などからなる。たとえば爆発事故が起きたとき、それを説明しようとする語りは、語り手が化学者か、警備担当者か、保険調査員か、市の調査委員かによって、将来の同様な災いをいかに防ぐかの関心のもとに異な

る原因が問題にされるだろう。

### 説明の二つのモード

「いかに」の問いに応じる説明と「なぜ」の問いに応じる説明は、説明されるべき事象に対する異なる実践的関心に対応している (Dray 1957: 161)。すでに起きてしまった何か (爆発とか、野戦病院での高すぎる罹患率とか) に対して、もしかして起こらずにすんだかもしれないのに「なぜ」という問いに対し、ぎちぎちと、もしこのことがなければ起こらなかったのではないか、将来もしそれを防ぐためには、これの生起をさまたげれば、あるいはあれをこれの代わりにしていればよいのかもしれないと、詰めていく、これが「なぜ」の問いによって始動する原因究明の説明にほかならない。それに対しエンストのような、通常のなりゆきでは起こらないはずのことを可能にしてしまう予測不可能な要因 (オイルタンクに穴が空いちゃってましたよ)、予期せぬ出来事を現実を生起させてしまう予測不可能な要因を明らかにして、出来事の連鎖の穴埋めをおこなう、これが「いかに」の問いによって始動する「連続的出来事系列」の、つまりことの経緯を語る語りだということになる。

これらも結局はヘンペルのモデルに書き直すことができると主張する実証主義者は、一般法則の知識——ヒューム的な経験的相関関係の規則性に由来する——が (たとえ暗黙のものであれ) こうした説明の語りを可能にしていると主張するだろう。しかしドレイによるとこれは逆立ちした議論だ。「科学的法則の定式化のほうで、こうした因果分析の説明の語りに依存しているのであって、その逆ではないのである」 (Dray 1957: 107)。

### 歴史的説明とは

歴史の説明においてヘンペルのモデルが不適切な最大の理由は、歴史的な出来事のほとんどが人間的な行為者による行為として生起する出来事であるという事実からくる問題で、これがドレイの議論の中心を占める。「歴史は見物対象 (spectacle) ではない」と彼は言う (Dray 1957: 140)。見物人として人の行動を眺め、そこに経験的な規則性や法則やパターンを見出そうとするアプローチ (「自然科学的」アプローチ) よりも、行為者の立場から、つまりその行為を導いている

目的や、解決しようとしている問題や、そこに適用しようとしている原理原則が何か等々の視点からアプローチするほうが、人の行為ははるかによく理解できるのだ (Dray 1957: 140)。

ここにおいて彼の議論は、すでに紹介したウィンチの論点と重なり合う。社会的、歴史的諸事象には、経験的な規則性から帰納される「外的」因果関係よりも、理由、動機、意味による行為や事象相互の「内的」結びつきの説明のほうが適している。「この点では、歴史は論理的には、社会科学よりは文学に連続している。社会科学という言葉で、何か社会『物理学』のようなものをイメージしての話ではあるが」(Dray 1957: 139)。

ドレイの議論は、しばしば彼以前の「解釈学的」歴史家たちの共感的 (emphathetic) アプローチ、行為者の経験を追経験 (re-experience) し、彼の思考を追思考 (re-think) し、彼の行為を追演 (re-enact) するという方法の一種、あるいは単なる焼き直しと誤解されてきた (Segal 2012: 519)。

彼自身は、ときにこうした用語を用いつつも、自らの方法を「合理的説明 (rational explanation)」(Dray 1957: 124) と呼んで、「自分を行為者の立場におけば、なぜその行為者がそういったことをおこなったのかを理解できる」という読心術まがい、あるいは単なる「想像的投影」ではないことを強調している (Dray 1957: 130)。それは単に自分の想像力を自由に羽ばたかせることなく、ある歴史的人物の残した日記や手紙その他の証拠資料から「帰納的、経験的」に、その人物が状況や問題をどのように見ていたかをつきとめ、彼が自ら設定した目的のために採用すべき手段についてその状況下でおこなった「計算 (calculation)」を再構成することである (Dray 1957: 129)。「行為を説明するためには、彼がどのような考慮の結果、まさに彼が実際にした通りに振る舞わねばならないと確信したのかを知る必要がある」(Dray 1957: 122)。その「計算」は行為者の状況認識に照らして合理的で理にかなっている、という想定に基づいて再構成される。この再構成は、あらたなデータ (たとえば行為者が状況について当然知っているだろうと想定されていた事実を、実は知らなかったということを示すような (Dray 1957: 131)) によって修正されるべき暫定的な再構成であるとされる。

残念なことに、彼の「合理的説明」は「計算」という概念をもちだしたことで、今度は、行為者によって意識的に考え抜かれた前もって計画された行為について

しか適用できない、との批判を受けることになる (Hanson 2013: 75)。しかしドレイ自身は、この「計算」が行為者によって命題として言語化されているとか、意識的になされたとか想定する必要はないと述べている (Dray 1957: 123)。彼によると「いやしくも、ある行為が合目的であるといえる以上は、意識的な熟考のレベルがどうであれ、そこには構成されるべき『計算』が存在している」のだ。ではそれはいったい誰がおこなった「計算」だというのだろうか。それは実際になされた合目的的行為そのものに内在している「計算」だというしかない。「熟考ぬきで何かをしたあとになって、行為者が自分自身の行為を理解しようとする場合にも、彼はこうした『計算』を全く同じやり方で再構成することによってそうするしかない」(Dray 1957: 123) のだから。

## 2.5 問題の所在

今日、回顧的な視点で眺め直すとき、1950年代に始まる人類学の第一次自然化問題において、大きな理論的影響を及ぼした二人の著作のなかに、人とその社会を対象とする人類学や歴史学のような研究に、当時の経験論的実証主義の規範を導入することが、いかに不適切に感じられたか、その問題点が浮き彫りになってくる。

ヘンペルの被覆法則モデル自体はネタみたいなものだ。本気でこのモデルにのっつた説明をしようとした人類学者がどれほどいただろうか。このような説明は、そもそも人類学がしたいと思っている説明ではない。ドレイは「説明」という実践そのものに着目することで、見事な軌道修正をしてくれる。その議論は人類学にも親和性がある。人類学は、まず第一に人々の説明行為についての研究でもあるのだから。ヘンペルはドレイによる歴史的説明を「不完全で不適切な」説明だと論じ、適切な被覆法則を加えてより科学的な説明にするよう提案している (Hempel 1978: 117-118) が、余計なお世話だ。ハンソンも言うように、そんなことをしても「探究の現実の対象から注意をそらし、些末な問題に注力することで、人間行為を理解し説明しようという社会科学者の努力を完全に捻じ曲げてしまう」(Hanson 2013: 87) だけだろう。

もちろん、人々の説明実践のあり方に注目することはヘンペルの説明モデルを拒絶する理由にはなるが、これ自体は必ずしも自然化と相容れないものではない。

ヘンペルのモデル自体が人類学（歴史学）を脅かす強敵であったというよりも、むしろそのベースにある経験論的実証主義による因果法則による出来事の理解という、自然科学を支える基本原則と、人間科学はもしかしたら折り合いがつかないかもしれないということのほうが、深刻な問題だ。

因果法則は経験的に与えられた、事象の生起の規則性である。つまり、先行する事象と後続する事象との一定不変の随伴関係が、前者が後者を「引き起こしている」として思念されたものである。そうした因果関係の連鎖によって現象を説明するのが、自然科学における正しい説明方法だ。

とすると、まず人間の社会制度や行為が合目的性をもっているように見えること自体が厄介な話だということになる。経験論的実証主義的説明は目的論とは相容れない。

あるいは諸行為や事象が、意味のつながりにしたがって生起する（ウィンチの言う各事象や行為に内在する概念どうしの内的な関係でつながっている）ように見えるのも厄介だ。つまりそこでは出来事は、「概念どうしのつながりにそって」、または何かの「計画にしたがって」、あるいは多種多様な「筋書き」にしたがって生起しているように見え、因果関係という独立した事象どうしの「外的」な結びつきだけでつながっているようにはどうしても見えない。ドレイが歴史的行為者の実践のなかの観察可能な規則性ではなく、そのなかにある「計算」を再構成することでそれが説明できるだろうと述べているのも、同じことの指摘である。

誰かに殴られると、殴られたほうはビリヤードボールのように単に受けた衝撃に応じて空間を移動するのではなく（もちろんその力が大きすぎる場合は物理的法則にしたがって放物線を描いて飛んでいくかもしれないが）、相手の「攻撃」を「防御」しようとしたり、それに「反撃」したり、物理法則が予測するだろう以上に遠くに移動したり（「逃げ」たり）といった不思議な、単純に物理的じゃない形での応答が生じる。場合によっては、それをバディどうしの友情の表れとして、同じく手痛いパンチで応酬して笑いあうなんてことすら起こりうる（私は嫌だが）。こういうのは、因果関係の連鎖に翻訳できるだろうか。一連の「結果」はそこに適用される「筋書き」や「戦略」、あるいはドレイの言う状況理解や目的やしかじかの動機のもとでのとるべき行為の「計算」といったものの違いに応じて変化するように見える。

こうした結果を左右する媒介物たちを、因果関係のなかに組み込むことができるだろうか。少なくとも、観察から経験的に得られる事象の生起の規則性は、これらの媒介物の発見には結びつかない。あるバス停でバスが発着する時間をどんなに観察しても、そこに見て取れる規則性はけっして、バスがそれにしたがって運行している時刻表のそれとは一致しない。逆に時刻表より必ず5分前後遅れて発着するといった規則性があったとしても、それはバスがそうした規則にのっとって運行されているということの意味しない。

観察された規則性だけでは、バスの運行は説明できない。その規則性が、渋滞や運転手の怠慢などの諸事情による時刻表からのずれとして説明されるしかないからだ。時刻表ぬきでバスの運行を記述することなど無理なのである。バスの運行の因果関係のなかで「時刻表」が占めている地位はなんだろう。他方、多くの自然現象においては、こうした媒介物の出番はない。太陽系の惑星たちは別になんらかの時刻表にしたがって運行しているわけではない。その規則性ある運行は万有引力の法則によって完全に記述、予測できる。バスと違って諸事情で万有引力の法則にしたがいそくなって遅刻したりもしない。

人間の社会的行為のこうした性格が、それは自然科学における因果関係とは別のロジックにしたがっているという印象を強く抱かせる。さらに、目的をもったり、規則にのっとったり、筋書きや戦略で行動したり、計算したりということが、もっぱら意識的におこなわれる過程であると想定した途端、これは「心」をもつ人間のみのできることであって、人間だけが特別な存在だ、というおなじみの極端な話になってしまいかねない。

もちろん、ウィンチもドレイも主観的な意味や計算だけを問題にしているわけではない。むしろウィンチの「内的関係」の網の目は、ある特定の生の形式の内部で非反省的な所与として存在するものであり、ドレイも意識的に計画されたものではないようなあらゆる合目的行為の背後にある「合理的な計算」の存在について語っている。人はつねに意識的に計画を描いたり、目的をたてたり、規則にのっとったり、計算したりしているわけではない。明確に意識されていない合目的な行為にすら見て取れる、こうした媒介物の存在性格は何か、そしてそれは因果的な説明モデルのなかでどのように扱われるのか、それがはっきりすれば、自然化について語る筋道が見つかるかもしれない。

### 3 自然化の可能性

#### 3.1 本当の原因ではない？

私が人類学における第二次自然化問題と呼んだ、人類学と社会生物学との論争についてはここでは詳しくは触れない。社会生物学の一部の論者たちが、生物進化理論における血縁淘汰の考え方で人間の社会的・文化的実践や制度を説明しようとしたことに対する人類学者側からの応答（一部の人類学者たちはそれを歓迎した（Harris 1979）が、多くは否定的に応答した（Sahlins 1976; 1977））がきっかけだった。社会生物学側にしばしば見られたある語り口が人類学者を苛立たせた。たとえばデイリとウィルソンは、ある種の社会でときに見られる嬰兒殺しの慣行について、特定の状況下（奇形児や重病の子の出産）では嬰兒を殺すことが包括適応度の上昇につながるものがその原因であると主張し、人類学者たちが現地の人々がその慣行の理由として提供する説明（そうした子供が超自然的な災いを招くから、といった）を重視することに異をとる。「多くの人類学者が、彼らの学問にとっての正当な主題は、どちらかという人々が彼らの行動に付与している『意味』であり、それらの行動の原因やそれらの行動自体の特性のほうではないと、考えていることは明らか」（Daly and Wilson 2008: 50）だというのだ。

彼らによると、どうやら人間行動を顕著に特徴づけている意味や概念を介して行動を組織するという特徴は、行為の因果的説明にとっては無視すべき「解釈」にすぎず、原因とはみなされないらしい。真の原因は、人々自身はまったく気づいてすらいない、包括適応度をより高めるような仕方で子供に対する世話を配分するよう進化してきた遺伝的プログラムの働きなのだという。これがいかに倒錯した議論であるかは浜本（2012）を参照されたいが、ここでのポイントは、ウィンチやドレイがまさに人間の行為や社会制度を説明する最も重要な要素とみなしている諸概念が、そして私たちが隣人たちの行為を相互に理解し説明するさいに依拠している道具立てのほとんどが、社会生物学者たちの因果説明から排除されているという事実である。

いったいこの人たちは何を考えているんだろう。彼らにとって「説明」とは単に真なる命題を提供するだけの作業なのだ。彼らには現地の人々のおこなう説明

は、自分たちの説明に競合する説明の一つ、論駁すべき説明の一つにすぎない。「説明」という行為が実践的な関心と密接に結びついていること、「説明」そのものが、人々が世界に働きかけ、それを変える実践に因果的にかかわっているということに、彼らはまったく思いたらない。単に間違っただけの説明として排除し、それが彼らの嬰兒殺しという慣行に因果的に関係している可能性を考えてもみないのである。

### 3.2 因果メカニズム

経験論的実証主義的な因果モデルでは、ウィンチやドレイが人間事象における説明のあり方とする、概念の内的なつながり、規則、合理的計算を、収容するのが困難なのだろうか。こうした困難を含まない代替的な因果関係のモデルがあるだろうか。「因果メカニズムモデル」は一見その候補に見える。戸田山によると、それは単に二つの事象の随伴関係（あるいは「統計的関連性」）ではなく、前件が後件を生じさせるメカニズム、「これこれこういう仕組みでそうなった」のだというタイプの説明を提供する（戸田山 2005: 220）。サモンによると、メカニズムモデルは単に世界に見られるさまざまな規則性に通暁するだけでは満足せず、こうした規則性を産んでいるその背後のメカニズムを問題にしようとする。世界を一種のブラックボックスとして見て、その作動具合を理解しようとしているのだと言ってもよい。説明はブラックボックスへの観察可能なインプットと観察可能なアウトプットを結びつけているメカニズムを明るみに出すことからなる（Salmon 1984: 276）。

サモンは 1665 年のロンドンでのペストの大流行を例にあげる。ペストは春に流行が始まり、12 月にはロンドンにはほぼ無人と化した。10 万人が死に、人々はわれ先に町を捨て田舎に逃げた。ネズミのあいだでの異常に高い死亡率がまず見られ、ついで人間のあいだでのペストの流行が起こるといった関係は古くから知られていた。ペスト菌が発見されるまでにはまだ 200 年の歳月が必要だったが、それにより、ネズミの高い死亡率とペストの大流行を結びつけるメカニズムが明らかになった。ペストはペスト菌による齧歯類とくにネズミ固有の伝染病だった。ペストに感染したネズミが商船に乗ってロンドンに運ばれる。そのネズミを刺したノミもペストに感染し、ノミはさらに他のネズミを刺し、感染を広げる。ついでそれら

のネズミを刺したノミが人間を刺し、人間のあいだに感染を広げる。こうしたペスト菌とネズミとノミと人間との因果的相互作用の連鎖が、ネズミの高い死亡率に続いてペストが流行するという入出力をつなぐ因果メカニズムを提供する (Salmon 1984: 271–272)。

この事例で見える限りでは、これはドレイの「連続的出来事系列モデル」に似ている。因果関係の前件と後件を、さらに細かい因果関係の連鎖として語り直すものである。もっとも、メカニズムというほどの内容があるようには見えない。ゲリングが評しているように「因果関係の相関（共変動）による説明とメカニズムによる説明のあいだには、因果メカニズム論者たちが主張しているほどの大きな違いはないのかもしれない」(Gerring 2008: 175)。それ以上に問題なのは、単に細分化されただけで、「メカニズム」を構成するのは同じく、事象の生起の経験的規則性であって、もしそうであれば、そこにはウィンチの内的関係もドレイの合理的計算も入り込む余地はない。

### 3.3 原因概念の拡張

ヒューム以来の経験論的な因果概念が、狭すぎたのではないだろうか。超越論的實在主義の立場から経験主義を批判するバスカーが指摘しているように、「因果的有効性の有無は、物質的世界に成立しえたであろう事態に『何らかの違い』をもたらすかどうかで判定される」(Bhaskar 2008: 91) とすれば、信念、目標、計画、式次第、筋書き、プロトコル、プログラム、設計、等々ありとあらゆるものが因果的な説明の要素となりうる。これらは一連の連続した流れである人間の実践のなかに組み込まれ、それを組織するものとなる。そこでは「信念が（因果的効力をもつ）欲望に転じるのも、欲望が行為に結実するのもなんの不思議もない。信念を欲望に変え、そして…さらに行為へと変換する欲求は、信念そのものがそうであるように、日々の実践的な生の営みのなかで生まれてくるものだからである」(Bhaskar 2008: 95)。計画が違えば、異なる計画 A、B のどちらをとるかで結果となる出来事には違いが生じる。設計が違えば、その結果ももちろん違ってくる。デザインが異なれば、プロトコルが違えば、違う筋書きで人々が相互行為すれば、物質的世界そのものに大きな違いがもたらされる。当たり前の話だ。これらが自然科学が問題にする「原因」のなかにほとんど顔を出さないとすれば、そ

のほうが奇妙なのである。もちろんそれには理由がある。自然は、なんの変更可能な計画も、変更可能な式次第も、規則も、プロトコルも、目標ももっていないのだから。でも、本当にそうだろうか。

## 4 形相因の復権？

### 4.1 アリストテレスと4原因説

ここでいきなりアリストテレスの4原因説をもちだすのは、唐突にすぎるだろうか。控えめに言っても、時代錯誤ではないか。たしかに彼の『自然学』は、上記のプログラムやデザイン的な要素（「形相」）に明確に原因の一つという位置づけを与えている。しかしそもそも彼の原因論は、のちに自然科学の因果理論に取って代わられるべき、過去の錯誤の産物にすぎなかったのではないか。そう考えることは、まるで今日の自然科学における実証的経験主義的因果論が、アリストテレスの因果論が廃棄されたあとに発見されたものであるかのように考える点で、間違っている。アリストテレス自身は、同時代にすでに存在していた機械的因果理論を熟知しており、彼の4原因説は、それに対峙する形で主張されている。人類学（あるいは人文科学）が自然化の議論との対決のなかで、プログラムのな媒介物の重視に収斂したのと同じ構図が、そこには見て取れるのである。しかも正反対の方向で。それは我々の問いに新しい眺めを与えてくれる。

彼の四つの原因のそれぞれは生成との関係で理解されなければならない。質料因（物に備わる属性や傾向性―それらのゆえに出来上がったものはかくある）、始動因（物が働きかけ作り出す側面―それによって云々のことが生じる）、形相因（最終生成物が備えている構造や形）、目的因（生成物が果たす役目・利得）は、独立にばらばらに働く原因ではない。それらは「目的因を中心とする連関をなしている」（国越 1998: 1）。

アリストテレスは、まず、自然事象の活動や機能を捉え、それを（1）目的因とする。そして、活動し機能する場面でこそ、その物の形や構造を捉えられるのであり、それが（2）形相因である。こうした形や構造を組成するのは、任意の素材ではなく特定の性質をもつ

素材でなければならず、これが (3) 質料因である。しかし、素材がひとりで或る一定の形や構造を生成することがあるとしても、それは偶然によることである。素材を形相因に従い一定の仕方です恒常的に組成していくものがあり、それが (4) 始動因である。(国越 1998: 1)

テーブルは、ある種の性質をもった素材(質料因)に、さまざまな外力を施す(始動因)ことで作られる。だが、適切な素材(例えば木)にただデタラメに力を加えたり切ったりしてもテーブルは生成しない。それは上に食事を置いて食べるためにある(目的因)。そうであるためにはテーブルは物を置くに適した平らな面をもち、ある高さに水平にそれを支える脚を備えている、ある程度の重量に耐えうる剛性等などの、特定の構造と本質を備えていなければならない。テーブルがその目的を果たすために備えていなければならない本質、構造、デザインなどが形相因である。この形相因にしたがって、切ったり組んだりすることでテーブルは誕生する。だからどうしたと言えるほど、簡単な議論である。

目的因と形相因が抜け落ちたものが今日の因果理論であろう。それは実はアリストテレスが対峙した「先行自然学者たちの機械論的、唯物論的自然観」を特徴づける考え方でもあった(千葉 1994b: 47)。アリストテレスは彼らの議論にも一定の正当性を認めている。

すなわち、自然を、なにかのために働くのでもなく、またそうあるのがより善いからとの理由でもなくて、あたかも「天」(ゼウス神)が雨を降らせるのは、穀物を成長させようがためにではなしに、かえって雨は必然によって降るのであるというように、そのように必然によって働くのだとしても、それを妨げるなものもないではないか?(けだし、上昇したものの〔蒸気〕は冷却されざるをえず、冷却されたものは水となって降下せざるをえないではないか?そして、このこと〔雨降り〕の生じたとき、穀物の成長が、それに付帯するだけなのだから)。同様にまた、たとい穀物が穀打ち場で腐ったとしても、雨が降ったのはこのためにはない、すなわち穀物が腐るようにと降ったのではない、それはただ、その腐りが雨降りに付帯して起こっただけのことである。(アリストテレス 1968: 73)

降雨は一連の因果関係のみによって起こるのであり、それが仮に穀物の成長をうながすとしても、あるいは穀物の腐敗につながるにしても、いずれにせよそれは降雨に付帯する単なる偶然的な出来事にすぎず、それらが降雨の目的であったわけではない。

しかし同じ機械論的な議論が身体の部分についても言えるだろうかと、彼は問い、機械論的自然学者たちの議論を真似て見せる。

自然的事物の諸部分にもこれと同様の関係があるのをなにか妨げようか？たとえば、歯が必然によって、しかもそのうち、前歯はとがっていて噛み切るのに適し、臼歯は広くて食物を噛み砕くのに役立つものとして、生えるにしても、それを妨げるなものもないではないか、すなわち、歯はこうした役にたつために生えたのではなくて、こうしたことはただ〔歯の必然的発生に付帯して〕偶発的に起こっただけのことではないか？なお、こうしたなにかのために〔目的適合性〕が含まれていると思われるところのその他の諸部分についても同様の問題がある。ところで〔このような必然論者によると〕およそいずれの部分でも、それらがあたかもなにかのために〔目的適合的に〕生じたならそう成ったときには、それらはすべて、そうあるに適したように自己偶発によって作られているので、生き残る。しかるに、そうでないものは減らし、また減び続けている、あたかもエムベドクレスが「人面の牛の子」についてそう言っているように。（アリストテレス 1968: 73-74）

前歯がとがっているのは、降雨と同様に一連の因果関係のみによってそうなったのであり、それが物を噛み切るのに適していたとしても、それは前歯を形成する因果的な必然的なプロセスに付帯的にたまたまそういう前歯が生成しただけであり、それを目的に形成されたわけではない。身体その他の部分について、もしそれがなんらかの目的にそのような特性をもっていたとしても、そうした特性はその部分の形成の必然的な因果的プロセスに付帯して偶然生じたものにすぎない。仮に身体諸部分がすべて何か有用な目的を果たすものとして形成されるとすれば、それはたまたまそうしたものだけが生き残り、そうではない異形のものとして生成したら、それらは減らしたまま減び続けているからというだけのことにすぎない。

あと何歩かでダーウィンになりそうな議論に見えるが、実は残念な議論だ。アリストテレスは「こうした論議が本当であることなどありえない」と断定する。というのは「これらのもの〔歯など〕のみならずあらゆる自然による事物は、常にまたは多くの場合にこのように生成するが、しかし偶運や自己偶発による物事はいずれもそうではないからである」（アリストテレス 1968: 74）。唯物論的・機械的な説明では、なぜ通常は目的適合的な形の生成のみがなされるのか、なぜ人面の牛の子のような妙なありとあらゆる形態の歯がもっと頻繁にランダムに生成されないのかの説明できない。それは「あたかも技術によっても生成するとすれ

ば」(アリストテレス 1968: 75) そうであるように、自然的に生成するのである。アリストテレスによると技術による生成は、「形相が外的にかつ偶合的に質料に賦課されるがゆえに、技術は自然の為し得ないことを成就する」。それが技術が自然と大きく異なる、その特徴である (アリストテレス 1968: 75; 千葉 1994b: 154)。自然的な生成においては、形相は外的に質量に賦課されるのではなく、そこに内在している。たまたま目的適合的なものを偶然生み出すかもしれない必然的生成ではなく、ある種すでにそうなるようプログラムされた生成なのである。

## 4.2 形相的視点の不幸

生成のプログラム性に焦点を当てるアリストテレスの原因論は、むしろ人文・社会科学における説明理論と相性が良さそうに見える。むしろ人間の技術や社会生活においては、「ゴール=目的因」と「デザイン/プログラム=形相因」を強調することは、逆にあまりに月並みだ。おまけに自然の領域においては、降雨の例のように、多くは目的も、それにいたる複雑な設計もない過程だけがあるのだとすれば、それは結局は古臭いノモス/ピュシス、慣習や法による秩序/自然的秩序、人文社会科学/自然科学という対立を、単に再生産してしまう。アリストテレスがほかならぬ『自然学』において4原因説を主張したという事実の重要性をとらえそこなうことになる。

この対立は、自然科学とは別物だと「自負」する人文・社会科学にとっても、実は不幸なことである。1960年代末から1970年代を通して文化人類学においても、すでに紹介したウィンチの議論に代表されるような、意味の優位性の主張が主流を占めたときがあったが、このいわば「形相」主義的な立場には、大きな落とし穴があったことを思い出す必要がある。

当時は、人間にとって世界とは意味づけられたものであり、この意味を介して人は世界に、そして社会とそこに生きる人々に働きかけ、そうした営為を通じて、まさにこの意味の世界そのものを再生産していくのだ、という考え方は、ほとんど誰もが認める公理のようなものですらあった。世界は意味づけられており(言語や象徴を通じて、あるいは無意識の構造によって)、そのなかで人々はそれぞれの文化のルール(暗黙のものであれ)にのっとって行動している。文化人類学の課題は、それぞれの社会における意味づけられた世界のあり方を記述し、その文

化のなかでメンバーとして受け入れられるためには知っておかなければならない規則を記述することだ（どこに重点を置くかによって、構造主義とか、記号論的、とか解釈人類学とか、エスノサイエンスとかさまざまな研究の流れがあった）とされた。

しかし、この立場にはとんでもなく厄介な問題が当初から潜んでいた。単純なウインチの議論のなかにすら、すでにはっきり見て取れる。彼は社会的世界においては、自然的事実とは異なり、出来事と言語の関係は内的であると主張していた。雷鳴という言葉が存在する前からその名前で呼ばれる電氣的現象は存在していたのに対し、投票という概念がないところでのちに投票と呼ばれることになる、紙に何か印をつけて箱に入れるといった行為がおこなわれていたとは考えられないから。言語、意味、概念が社会的現象に先行する。だが肝心の「投票」という概念は、どこからやってきたのだろうか。何も無いところに突然その概念が現れ、それが生の形式のなかで暗黙のうちに共有されたなどということ信じろというのだろうか。

重要なのは、こうした問いはそもそも問われることがないという点である。ある概念が、非概念からいかにして生成したかと問うことはできない。人はすでに意味づけられた世界のなかに生まれおち、それを身につけて大人になる。意味は、つねにすでにそこにあるものとして経験される。人は一連の規則をもったゲーム（複数）のなかに自らを見出し、ゲームとその規則は不動不変の現実として経験される。それは共時的にのみ分析・記述できるのであり、ゲームの由来やこれからの変化については、そのなかでは語るべきがない。「投票」といういかにも人為的な例をウインチが用いてくれたおかげで、この不都合な事実には私たちは気づかずにはおれない。たしかに「投票」の概念は太古の昔からあったようなものではない。意味はつねに生成し、形を変え続ける。この事実自体が、こうしたアプローチによっては説明できないのである。かつてレヴィ＝ストロースは研究対象である象徴的思惟、あるいは意味のシステムについて次のように述べた。

動物的な生活段階のどの時点で、またどのような状況のもとであったにせよ、言語はただ一挙に出現するしかなかったのである。物事がしだいに意味をもち始めたなどということはいえない。…一切のものが意味をもたなかった段階から、すべてのものが意味を

もった段階への移行が起こったのである。この根本的変化は、知識の領域にはその対応物をもたない。知識というものは少しずつゆっくと増えていくものだから。言い換えれば、全宇宙が一気に意味をもつようになった瞬間にも、それによって世界がよりよく知られるようになったというわけではなかったのである。(Lévi-Strauss 1987[1950]: 59-60)

そんな馬鹿な、と最初は啞然としたのだが、のちには私はこれを単に威勢のよい敗北宣言としか受け止められなくなっていた。構造主義には信じがたい限界があったのである。そこに現れているのは、変化そのものが可視化しえず、また考えることすらできない共時的に記述されるしかない秩序なのだ。そこでは人々の社会的実践は、あたかも既存のルールにそった動き、筋書きの実演、プログラムの実行のようなものに見えてしまう。問題は、我々は自分たちの実践がけっしてそんなものではないことをよく知っているという点である。

もちろん前もって熟考された計画や厳格な手順にそって物事がなされることもある。さもないと自動車もパソコンも存在しえなかつただろう。でも我々の毎日の暮らしはけっしてそんなふうにはばかりは進行していない。それなりのルールや筋書きを当てにして振る舞っているように思うが、失敗や読み違いで、それらは結構行き当たりばったりに変更されたり、キャンセルされたり、思いがけない仕方解決されたりする。ひどい場合、五里霧中である。なんとか切り抜けて、あとになって振り返ったら、すべてはあたかもそれなりの物語や筋書き、手順にそって進行していたかのように見えて、実際にそうだったような気になったり、逆にすべてが目算外れでがっかりしたり。そんなことを、たいして意識的な推論や熟考をとまわずにやっつけてのけている。そんななかから、当の私たち自身も気が付かないうちに、新しい概念や意味や規則が生成し、いつのまにか、まるで昔からそうであったかのように、それにそって考えたり行為したりすることに慣れてしまっている。その事実気づいているかどうかは別として。確固たる秩序に見えるものは、実は常時変態・新生成しているものが、単にそのように見えているだけなのである(浜本 2001, 13 章)。そうした自分たちにとっておなじみの実践のあり方とは、人類学が提示しようとしていた(1970年代までの)行動モデルは明らかに乖離していた。

この難問、共時と通時、構造と歴史、規約と実践をどのように調停するかのさまざまな試みについてはここでは割愛しよう(たとえば, Bourdieu 1977; Sahllins

1981)。

アリストテレスの目的因と形相因は、こうした自然科学／人文・社会科学の二項対立の袋小路から抜け出す別の選択肢を示唆しているように見える。自然の領域における目的性、プログラム性を主題化しているという点で。もちろんアリストテレスの形相概念は、形相そのものの変容、生成については一切考えていないので（もしそうだとするとそれを4原因の一つにはできなかつただろう）、上述の難問には何も答えてはくれない。しかし、そこには我々が常識的に抱いている視点を逆転させる、思いもよらない観点が提出されている。

### 4.3 比喩の反転

機械論者に対して4原因説を主張する、すでに引用したくんだりからも明らかのように、アリストテレスは生物の自己生成のなかに自然を最も特徴づけるものを見ていた。寝台は寝台から生まれないが、人間は人間から生まれる（アリストテレス 1968: 48）のであり、千葉によると、彼は自分が「最も自然的なこと」と考えた「生物の複製機構の分析を通じて、始動因がすでに形相・目的因を現実的にか可能的にか具現していることを発見し、四原因論からなる彼の因果性の理論を展開するに至った」のだった（千葉 1994a: 54）。

すでに述べたように、アリストテレスは自然の生成と、技術的な制作とのあいだの並行関係を認めていた。テーブルの作成において木材は質料を提供するが、テーブルの生成はそのなかにはなく、人間の意図のもと形相（設計理念、工作手順、プログラム）が「外的かつ偶合的に賦課」されることによって誕生する。一方自然のほうは同じことを「あたかも技術によって生成するとすればそうである」ように、つまりプログラムにしたがって、自然的に生成する。わかりきったことだ、と我々は言うだろう。人間は、目的から出発して、それをどのような手順、筋書き、プログラムで実現するかに基づきつつ、事をなす。これが人間実践の基本的なあり方だ。そして私たちは、あたかも誰かが設計でもしたかのような複雑なプログラムに基づくプロセスを自然のなかに見出して驚嘆する。ついインテリジェントな存在が背後にいるんじゃないかと考えずらす。

しかしアリストテレスにあっては、事態は逆さまである。彼は、当時の機械論的唯物論者たちが、技術との並行関係から、人工物の形相をもって自然物の形相

を理解しようとする、つまり質料に対して外的、偶有的にのみ賦課されるものとして理解しようすることに反駁する。自然においては形相は質料に内在する自体的な原理であり、質料より形相こそが第一義の自然なのである（千葉 1994b: 155）。

というわけで私たちは比喩の方向を逆転させなければならない。人間の意図的な行為の図式によって比喩的に生物体の生成のプログラムを眺める（「あたかも目的があるかのように、あたかも手順にしたがっているかのように」）のではなく、むしろ生物体の生成のプログラムによって比喩的に、人間の実践におけるプログラム性を理解するのである。何も違わないではないかとは言わないでほしい。形相の生成・変化を主題化しようとした場合、この違いは大きい。なぜなら、生物学の領域においては、生成をつかさどるプログラム自体の生成について語る言葉がすでに存在しているからである。ダーウィニズムがそれだ。

ダーウィンの進化論は生物学から目的論を最終的に消し去ることに成功したとしばしば考えられている。しかしそれは正確ではない。デネットによるとダーウィンは目的論を根絶したわけではなく、それを自然化したのだ（Dennett 2017: 912）。デネットは同時に、ダーウィンは形相因をも自然化したのだと付け加えるべきだっただろう。設定者のない目的の進化、デザイナーやプログラマーなきデザインの進化について、ためらいなく語り理論化することができたとき私たちは、全知全能には程遠いながら、ささやかな目的を設定しデザインするそんな人間の実践について、他の生物たちからの断絶なしに考え始めることができるだろう。デネット（Dennett 2017）に見て取れるようにダーウィン進化論は、すでに実質的にデザインやプログラムを主題化する研究プロジェクトになっている。経験的実証主義の重力とデザインの神義論への恐れが、それに従事する生物学者たちをして機械論的な説明に拘泥し、人間社会における形相因の優位から目を背けさせることがあるにしても、今必要なのは、おそらく経験論からの離脱なのだろう。

ウィンチやドレイが後押しするタイプの説明や理解はそのとき、自然科学とは無縁な直感や共感や解釈学や読心術の話ではない。それは人々がどこか特定の社会的空間のなかで相互に形成した目的やプログラム群を、リバースエンジニアリングする作業なのだ。こうして、いかなる目的や実践のプログラムがその社会空間のなかで生み出され広がり、進化（変化）していくかに関する生態学的研究に

属するものとして、人類学その他の人文社会科学を位置づけることが可能になるだろう。単に人間が意識して作成し実行する目的やプログラム、規則だけでなく、ウィンチそしてドレイが明らかに見据えていた、生の形式のうちに非反省的に所与としてあるそれらや、意識以前の合理的「計算」の問題を、他の生物におけるデザインやプログラムと断絶なしに考えることを可能にするだろう。

もはやただあげるだけしかできないが、認知科学や生態心理学の成果に応答するなかで生まれた現象学の新しい潮流（e.g. Noë 2004; Gallagher and Zahavi 2007; Käufer and Chemero 2016）や、河野や田中、河本らの、それぞれ異なる理論的出発点にたっているが、人間の意識、実践、環境世界の相互交渉を解き明かそうとする一連の考察（e.g. 河野 2003, 2011; 河本 2006; 田中 2017）などのなかにも、多くのヒントを見出すことができる。次は人類学が、さまざまな文化的事象の生成について民族誌的にそれを試みてみる番だ。

## 参考文献

### 〈日本語〉

アリストテレス

1968 『自然学』（アリストテレス全集3）出隆監修，山本光雄編，岩崎允胤訳，東京：岩波書店。

大畑裕嗣

2019 「何が起こった（ている）？—ウィリアム・ドレイの歴史的説明論と戦後社会学、現代日本の社会運動論」『明治大学人文科学研究紀要』85：49-82

河本英夫

2006 『システム現象学——オートポイエーシスの第四領域』東京：新曜社。

国越道貴

1998 「自然の探究におけるアリストテレスの学問方法論に関する研究」九州大学大学院博士論文。

河野哲也

2003 『エコロジカルな心の哲学——ギブソンの实在論から』東京：勁草書房。

2011 『意識は实在しない——心・知覚・自由』東京：講談社。

田中彰吾

2017 『生きられた〈私〉をもとめて——身体・意識・他者』（心の科学のための哲学入門4）京都：北大路書房。

千葉恵

1994a 「アリストテレス『自然学』II9における目的と必然性」『西洋古典学研究』42: 47-56。

1994b 「アリストテレスの目的論的自然観I」『北海道大学文学部紀要』42(2): 149-170。

戸田山和久

2005 『科学哲学の冒険——サイエンスの目的と方法をさぐる』東京：日本放送出版協会。

浜本満

1985 「文化相対主義の代価」（特集 文化人類学の現在）『理想』627: 105-121。

2001 『秩序の方法——ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』東京：弘文堂。

2012 「比喩の使用と濫用——進化論における志向的語り口の問題点」浜本満編『進化／文化』

(共生社会学論叢 8) pp. 71–98。福岡：九州大学大学院人間環境学府共生社会学講座。

〈外国語〉

- Bhaskar, R.  
2008 *A Realist Theory of Science*. London: Verso.
- Bourdieu, P.  
1977 *Outline of a Theory of Practice*. Translated by R. Nice. Cambridge: Cambridge University Press.
- Boyer, P.  
2001 *Religion Explained: The Evolutionary Origins of Religious Thought*. New York: Basic Books.
- Daly, M. and M. Wilson  
2008 *Homicide: Foundations of Human Behavior*. New York: Routledge.
- Danto, A. C.  
1958 Laws and Explanation in History William Dray. *Ethics* 68(4): 297–299.
- Dennett, D. C.  
1995 *Darwin's Dangerous Idea: Evolution and the Meanings of Life*. Tokyo: Simon & Schuster.  
2017 *From Bacteria to Bach and Back: The Evolution of Minds* (Kindle edition). London: Penguin UK.
- Dray, W. H.  
1957 *Laws and Explanation in History*. Oxford: Oxford University Press.
- Evans-Pritchard, E. E.  
1951 *Social Anthropology*. London: Cohen and West Ltd.
- Gallager, S. and D. Zahavi  
2007 *The Phenomenological Mind*. London: Routledge.
- Gellner, E., I. C. Jarvie, and J. Agassi  
1973 *Cause and Meaning in the Social Sciences*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Gerring, J.  
2008 The Mechanismic Worldview: Thinking Inside the Box. *British Journal of Political Science* 38(1): 161–179.
- Hanson, F. A.  
2013 *Meaning in Culture*. London: Routledge.
- Harris, M.  
1979 *Cultural Materialism: The Struggle for a Science of Culture*. New York: Random House.
- Hempel, C.  
1978 Explanation in Science and in History. In W. H. Dray (ed.) *Philosophical Analysis and History*, pp. 95–126. Westport: Greenwood Press.
- Hempel, C. and P. Oppenheim  
1948 Studies in the Logic of Explanation. *Philosophy of Science* 15(2): 135–175.
- Hollis, M. and S. Lukes  
1982 *Rationality and Relativism*. Oxford: Basil Blackwell.
- Jarvie, I. C.  
1972 *Concepts and Society*. London: Routledge and K. Paul.
- Käufer, S. and A. Chemero  
2016 *Phenomenology: An Introduction*. Cambridge: Polity.
- Lévi-Strauss, C.  
1987[1950] *Introduction to the Work of Marcel Mauss*. Translated by F. Baker. London: Routledge & Kegan Paul.
- Mill, J. S.  
2011[1843] *A System of Logic, Ratiocinative and Inductive*. Oxford: Benediction Classics.
- Noë, A.  
2004 *Action in Perception*. Cambridge: MIT Press.

- Sahlins, M. D.  
1976 *Culture and Practical Reason*. Chicago: University of Chicago Press.  
1977 *The Use and Abuse of Biology: An Anthropological Critique of Sociobiology*. Ann Arbor: University of Michigan Press.  
1981 *Historical Metaphors and Mythical Realities: Structure in the Early History of the Sandwich Islands Kingdom* (ASAO Special Publications 1). Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Salmon, W. C.  
1984 *Scientific Explanation and the Causal Structure of the World*. Princeton: Princeton University Press.
- Segal, R. A.  
2012 Clifford Geertz's Interpretive Approach to Religion. *Religion Compass* 612 5:11–524 ()
- Wilson, B. R.  
1970 *Rationality*. Oxford: Basil Blackwell.
- Wilson, E. O.  
1999 *Consilience: The Unity of Knowledge* (Kindle edition). New York: Vintage Books.
- Winch, P.  
1958 *The Idea of a Social Science and Its Relation to Philosophy*. London: Routledge and Kegan Paul.  
1964 Understanding a Primitive Society. *American Philosophical Quarterly* 1(4): 307–324.
- Wright, G. H. von  
1971 *Explanation and Understanding*. London: Routledge and K. Paul.